

## 本学「器楽Ⅰ・Ⅱ」における学修上の課題（序報） — ピアノ初学者の現状からの報告 —

永井正幸\*

大阪青山大学健康科学部子ども教育学科

Learning challenges associated with Instrumental Music I and II courses at  
Osaka Aoyama University (preliminary report):  
Focus on the learning experiences of beginner piano students

Masayuki NAGAI

Faculty of Health Science, Osaka Aoyama University

**Summary** This study reports on the challenges faced by beginner piano students taking the first-year courses of Instrumental Music I (first semester) and Instrumental Music II (second semester) offered by the Department of Child Education, Faculty of Health Sciences, Osaka Aoyama University.

For beginners, the credit requirement to pass Instrumental Music II is mastering No. 90 in Ferdinand Beyer's Elementary Instruction Book. This study reviews the learning processes of students who did not pass this credit requirement and identifies for further consideration the following four learning challenges faced by the faculty: (1) initiatives to improve sight-reading skills for sheet music, (2) formulation of a plan to prepare/review the curriculum over the first-year summer break, (3) how to approach study materials other than the Beyer method, and (4) a review of the syllabus for Instrumental Music II.

**Keywords:** beginner piano student, Beyer's Elementary Instruction Book, Beyer No. 90, sight-reading skill  
ピアノ初学者、バイエル教則本、バイエル 90 番、読譜力

### 1. はじめに

大阪青山大学健康科学部子ども教育学科(以下本学)では、ピアノ演奏技能を修得し、保育・教職現場における実践につなげるため、4年間にわたりピアノを学ぶことができる履修課程を構築している。1・2年次でピアノ基礎技能を確立し、保育現場で求められる専門性の学びへとつなげ、3・4年次では専門性を究めると共に保育・教職現場で活かすことのできるピアノ実践力を養うことを学修目標としている。

中でも大学でピアノを学び始める初学者にとり、基礎技能修得を目標とした1年次の学修内容を確実に学び取ることは、その後の応用・実践を意図した学びにつなげるためにも重要である。しかし「学修内容を確

実に学び取る」という部分については、初学者の中で個人差があり、現状では必ずしもすべての初学者が1年次の学修内容を「確実に」学び取っているとは言えない。具体的には、1年次履修科目「器楽Ⅰ・Ⅱ」において学修する課題（後述するグレード課題曲など）を終えることができず、科目の単位認定要件を満たすことができない初学者が毎年出ていることが挙げられる。このことは、初学者に対する指導を進める中で、改善すべき授業展開上の問題点があることを意味しているのではないであろうか。

したがって、本稿では1年次履修科目「器楽Ⅰ・Ⅱ」における、初学者に対するピアノ基礎技能修得を目的とした取り組みの現状を検討し、そこから示唆される課題について報告する。

---

\*Email: m-nagai@osaka-aoyama.ac.jp  
〒562-8580 箕面市新稲2-11-1

## 2. 「器楽Ⅰ・Ⅱ」の授業概要

### (1) 「器楽Ⅰ・Ⅱ」の学修目標

「器楽Ⅰ・Ⅱ」は必修科目になっているため、ピアノ初学者を含めた1年次生全員が履修対象者となる。前期科目「器楽Ⅰ」と後期科目「器楽Ⅱ」の学修を通して、初学者は正確に楽譜を読む力（読譜力）及び基礎的な演奏技術を身につけることを目標とし、ピアノ既習者は個々の進度に合わせた楽曲を学びながら、演奏技術及び表現力を高めることを学修目標としている。

### (2) ピアノ初学者が使用している教材について

「器楽Ⅰ・器楽Ⅱ」の授業において、ピアノ初学者が使用する教材は、①全訳バイエルピアノ教則本（全音楽譜出版社 以下バイエル）、②やさしく学べるピアノ100（関西地区大学音楽教育学会編著 音楽之友社）、③保育用ピアノマーチ集（一宮道子編 全音楽譜出版社）の3種類である。なお、③のみ「器楽Ⅱ」から使用する。

### (3) 本学ピアノグレード制について

本学では、ピアノ技能の習熟度を示す基準として独自のピアノグレードを設けている。グレードは10段階に分かれており、ピアノ未経験者対象であるグレード1から数字が上がるにしたがって、グレード課題曲の難易度が高くなる。各グレード内の課題曲をすべて修了すれば、次のグレードに進むことができる。

グレード1から4までは、バイエルから選択された66曲の課題曲を学修する（表1参照）。グレード4については、バイエル修了後、同じグレード内にある「ブルクミュラー25の練習曲」以下ブルクミュラー）から選択された楽曲に進む。グレード5から9までは、ブルクミュラーの他に「ソナチネアルバム」や「ソナタアルバム」から選択された楽曲を学修する。最終グレードである10では、教則本にとらわれず、より進んだ演奏・表現技術が含まれている楽曲に取り組む。

なお、本稿は初学者の1年次学修過程についての報告としているため、表1では初学者用教材であるバイエルを使用しないグレード5以上の課題曲を省略している。

学修を開始するグレードについては、入学時に実施しているグレード調査（ピアノ経験の程度を問う内容）の結果を基に振り分けるため、学生によって始めるグレードが異なる。

グレード（1～4）別バイエル課題曲の開始基準で

あるが、初学者はグレード1から始め、8分音符の学修が必要な学生はグレード2から始める。音階学修から始める学生はグレード3となり、バイエルに含まれている音楽知識や演奏技能を既に有する学生は、バイエルのまとめともいべきグレード4から始め、ブルクミュラーにつなげる。

表1 ピアノグレード（1～4）別バイエル課題曲一覧

グレード1	3,4,5,6,7,9,12,13,14,17,18,20,23,24,27,29,32,33,35,39,41
グレード2	44,46,48,51,52,53,54,56,59,61,62
グレード3	ハ調長音階,65,66,ト調長音階,70,71,72,ニ調長音階,75,76,78,イ調長音階,79,80,ホ調長音階,82,85,86,88,90,イ調短音階,91,93,ヘ調長音階,95,96,97,98,変ロ調長音階
グレード4	100,102,104,半音階練習,105及びブルクミュラー25の練習曲より1,2,5等

### (4) 「器楽Ⅰ」における初学者を対象とした授業の概要

「器楽Ⅰ」では、楽譜の読み方やピアノ演奏に必要な基礎技術・知識を学ぶ授業を展開している。

初学者は、グレード1においてバイエルを使用した学修を進める他、「やさしく学べるピアノ100」から選択された4曲（ちょうちょう・むすんでひらいて・かっこう・みつばちマーチ）を学ぶ。

授業開始後2か月間の学修成果を確認するため、初学者を対象に、9回目の授業内でバイエルの小テストを実施している。

「器楽Ⅰ」の単位認定要件として、後述する「器楽Ⅱ」で課しているバイエルの学修到達番号といった決まりは無い。

本学では、「器楽Ⅰ」に限らず、他の器楽系授業のすべてを複数名の教員が担当しており、履修学生全体を教員1人あたり4～5人ずつのグループに分けて指導している。

また、器楽の授業では、授業内容を記録する「レッスンカルテ」と呼ばれる記録用紙を配布している。学生により記入されたレッスンカルテは、前期・後期の各最終授業終了後に提出となり、教員が学修状況について確認した後、学生に返却している。

### (5) 「器楽Ⅱ」における初学者を対象とした授業の概要

「器楽Ⅱ」では、全15回の授業をバイエルなどのグレード課題曲を学修する授業（9回）と保育現場で活用できるリズム曲を学修する授業（6回）に分け、

これらを隔週で行っている。後者の授業では、「やさしく学べるピアノ100」及び「保育用ピアノマーチ集」から選択された計6曲（きらきら星・気のいいあひる・かわいいオーガスティン・うつくしいながれ・ジャバマーチ・ロングロングアゴー）を初学者の課題曲としながら、授業内試験を実施している。

「器楽Ⅱ」の単位認定要件として、初学者に対し、バイエル90番修了を課している。その理由として、90番までの課題曲の中に、ピアノ基礎技能を学ぶ上で必要な項目である音価・奏法・強弱記号・拍子・調性・速度用語の主な中身が含まれているためである。90番までに登場する学修項目の主な内容について、表2に示した。

入学後、「器楽Ⅰ」でグレード1から始めた初学者は、グレード3として位置づけている90番までの約50曲を1年間で修了しなければならない。1年次後期科目「器楽Ⅱ」の最終授業終了時に、バイエル90番を修了していない学生に対しては、春休みに補習を実施している。

表2 学修項目の主な内容（バイエル90番まで）

音価	音符:全音符、2分・4分・8分・16分音符、 付点2分・付点4分・付点8分音符、3連符 休符:全休符、2分・4分・8分休符
変化記号	シャープ(♯):半音上げる フラット(♭):半音下げる ナチュラル(♮):♯や♭などがついた音を元に戻す
奏法	スラー:異なる高さの2つ以上の音をつなげ、なめらかに演奏する タイ:同じ高さにある2つの音をつなげ、2つ目の音は再打鍵しない スタッカート:その音を短く切る レガート:なめらかに アクセント:その音を強く弾く フェルマータ:その音符や休符をほどよくのばす 等
強弱記号	フォルテ(f):強く メゾフォルテ(mf):やや強く ピアノ(p):弱く ピアノニッシモ(pp):とても弱く クレシェンド(crescendo):だんだん強く デクレシェンド(decrescendo):だんだん弱く 等
拍子	4分の4拍子、4分の3拍子、4分の2拍子、8分の6拍子、8分の3拍子
調	長調:ハ長調、ト長調、ニ長調、イ長調、ホ長調 短調:イ短調
速度用語	モデラート(Moderato):中ぐらいの速さで アレグレット(Allegretto):やや速く アンダンテ(Andante):歩くような速さで コモド(Comodo):気楽に、快適な速さで 等

### 3. 本授業におけるピアノ初学者の現状

#### (1) 「器楽Ⅰ」における初学者の学修

「器楽Ⅰ」において、初学者が最初に取り組む学修項目として、「正確な読譜」が挙げられる。譜面に書いてあることを正しく理解することは、ピアノ基礎技能修得に欠かせない段階である。

読譜学修は、音符の種類や拍子、リズムなどの基礎理論（楽典）の学修と共通している。そのため、楽典の学修を確実に進めている初学者は、譜面を正しく読むことができるようになってきているが、理論的な学修が不足している初学者は、読譜に困難を来すことが多い。このような初学者に広く見られる読譜上の問題点として、①音符を読むことが苦手であるため、片仮名でドレミ・・・と楽譜に書く、②シャープ(♯)やフラット(♭)が付いている音を色で塗る、③ヘ音記号の音符が読みにくい、④付点音符の付点表記を見落とす、⑤休符を見落とす、⑥音部記号（ト音記号・ヘ音記号）や拍子、調号を確かめずに弾き始める、などが挙げられる。これらの項目を抱える初学者に対しては、譜面に書いてあることを感覚的に捉えず、理論として、その仕組みを吸収することができるよう指導を行うことで改善を図っている。

鍵盤の音の位置を覚える学修では、譜面に書いてある音と鍵盤上の音の位置を相互に関連させながら学びを進めるため、ここでも読譜の基礎が必要となる。最初に中央のド（一点ハ音）の位置を覚えた後、他の音の位置を覚える方法が一般的であるが、初学者の中には、学修開始からある程度時間が経過した段階においても、わからない音があると、その都度、中央のド（一点ハ音）から数えてしまうケースがみられる。このことは、新しい楽曲に取り組むときの読譜に時間を要することにもなり、改善しなければならない点である。

手の構え方や指の動作については、鍵盤に手を置いた時の手首の高さが低すぎることや、小指の外側の大部分が鍵盤に接している状態で弾く、などの技術上の問題点が広く見られる。これらの動作は、より発展的な技術の修得を困難なものとする可能性を孕んでいるため、改善を図っているが、その効果の出方には個人差がある状況となっている。

#### (2) 予習・復習について

グレード課題曲やリズム課題曲の学修を進めるためには、予習・復習が必要であることは言うまでもない。個々の学生の進度に合わせた指導を行っている中、予

習や復習の指示も個々の学生の理解度に合わせて行っている。予習・復習の成果が授業時に表れている初学者がいる一方で、練習不足で授業に参加する学生や、夏期・冬期休業期間中の練習不足が明らかな学生も見られる。

### (3) 「器楽Ⅱ」におけるバイエル 90 番の到達状況について

「器楽Ⅱ」の単位認定要件として、バイエル 90 番を修了しなければならないことはすでに述べたが、ここ数年、初学者全体の 6 割前後が「器楽Ⅱ」の最終授業終了時にバイエル 90 番に到達できず、春休みの補習に回っている。そして、補習対象者のうち「器楽Ⅱ」の単位認定となる割合が、多くても 4 割を超えない状態が続いている(2015 年度～2018 年度)。グレード課題曲を学修する授業(9回)とリズム課題曲を学修する授業(6回)で構成される「器楽Ⅱ」において、バイエルを学修する授業回が 9 回しかなく、バイエルに取り組む時間が少ないことや、前出の読譜力の問題・予習復習の問題などの要因が加わり、初学者の学修進度が遅れているものと考えられる。

## 4. 本授業における今後の課題

### (1) 読譜力の向上について

初学者が「器楽Ⅰ・Ⅱ」の学修において、バイエル 90 番を修了することができない要因の一つとして、読譜が苦手であることが挙げられるであろう。他にも鍵盤の音の位置を把握することが苦手であることや、手の構え方・指の動作といった技術的な問題も挙げられるが、譜面を読むことができなければ、音楽の基礎を修得したとは言えないのではないだろうか。したがって、読譜を苦手とする学生に対する読譜力向上の取り組みについて検討する必要があるものと考えられる。例えば、読譜力向上を目的とした小テスト(楽典や簡単な初見)を「器楽Ⅰ・Ⅱ」両科目に導入することも一案であろう。

### (2) 1 年次夏休みの予習・復習計画の策定

初学者の授業時間外の取り組みとして、1 年次夏期休業期間中のバイエルの予習・復習は、学修の継続性確保の観点から重要である。しかしながら、後期授業開始時において夏休み中の練習不足が明らかな学生が散見されるため、計画性を伴った予習・復習の取り組みが必要であろう。具体的な方法として、前述のレッ

スカルテを手掛かりに、学生自ら「夏休みの予習・復習計画表」を作成し、その進捗状況を後期授業の「器楽Ⅱ」の教授内容として反映させていくことも考えられる。

### (3) バイエル以外の教材に対する取り組みのあり方

2 の(4)及び(5)で述べたとおり、「器楽Ⅰ・Ⅱ」において、初学者はバイエルの他に「やさしく学べるピアノ 100」及び「保育用ピアノマーチ集」から選択されたリズム課題曲(前期 4 曲・後期 6 曲)を学修する。

「器楽Ⅱ」における課題 6 曲(きらきら星・気の良いあひる・ジャバマーチなど)については、授業内試験を実施することで学修成果を確認しているが、試験までに全 6 曲を修得できない学生やバイエルの学修と両立させることが難しい学生が見受けられる。そのため、このような現状にある初学者に対する主な検討課題として、①授業内試験の実施時期の変更、②学修課題量(リズム曲 6 曲)の調整、③次項とも関連するが「器楽Ⅱ」におけるリズム曲授業回数の調整、の 3 点を挙げる。①については、例えば、現在 12 回目の授業で実施しているリズム曲課題試験を 15 回目の授業最終回で実施することで、リズム課題曲の学修に余裕を持たせる、②については、より多くのバイエル課題曲をこなすために、バイエルの学修と並行して行うリズム曲学修の課題曲数を 6 曲から 1～2 曲減らす、そして③についても、バイエルの学修進度を速めるため、リズム課題曲を学修する授業(6回)を減らす、といった案を踏まえながら、検討する。

### (4) 「器楽Ⅱ」におけるシラバスの見直し

ここ数年、初学者全体の 6 割前後が、春休みの補習に回る状態が続いていることは、3 の(3)において述べた。その要因として、読譜力の問題や夏休みの予習・復習不足の他に、「器楽Ⅱ」においてバイエルを学ぶ授業とリズム課題曲を学ぶ授業を隔週で行っていることが、バイエルの進捗状況に影響を及ぼしていると考えられる。

補習は、「器楽Ⅱ」の単位認定要件を満たすために必要な取り組みの一つであるが、基本的には補習に頼らない学修の進め方が望ましい。したがって初学者に対する現行の授業形式のあり方の検討を進める。例えば、バイエルとリズム課題曲を隔週で学修する現行形式から、リズム課題曲を学修する授業回においてもバイエルを学修する、つまりバイエルを 15 回すべての授業回で学修する形式に変更することにより、バイエ

ル課題曲の学修進度が速くなり、「器楽Ⅱ」の単位要件を満たすことにつながるものとする。このような授業形式の変更も含めて、バイエルを中心に据えた授業を導入するためにも、「器楽Ⅱ」のシラバスの見直しを図る。

## 5. おわりに

入学後初めてピアノを学ぶ学生にとり、楽譜に書いてある多くの音符を読みながら、左右の手の異なる動きでもって自分の音を聴きながら演奏することは容易な作業ではないであろう。

しかし、このようなスキルを修得しなければ、子ども達に楽曲の持つ多彩な音楽表現の楽しさをピアノで伝えることは難しいといえるのではないだろうか。

ピアノ演奏に関する基礎技術の不足は、楽曲に対する豊かなイメージを自身の中で持っていたとしても、その表現のあり様を十分に伝えることができない可能性を多大に含んでいる。したがって、ピアノ初学者が、音楽の基礎知識やピアノ演奏の基礎技術を確実に修得することが最重要課題である。そのためには、本学「器楽Ⅰ・Ⅱ」における初学者の学修課題を継続的に見直し、検討結果を授業に反映させていく試みが必要である。

## 参考文献

フェルディナント・バイエル. 全訳バイエルピアノ教則本. 全音楽譜出版社出版部編. 全音楽譜出版社, 東京, 出版年未記載

